

## 「世界最速」イスラエルでのワクチン接種体験

イスラエル国立ヘブライ大学大学院（総合商社休職中） 徳永 勇樹

---

イスラエルのワクチン接種件数が順調に伸びている。昨年末に接種が開始されて以降、この4カ月で540万人（イスラエルの人口929万人の6割弱に相当）がワクチン接種を完了している。新規感染者の減少に伴い、厳格なロックダウンは既に解除され、レストランの屋内営業も再開した。4月18日には屋外でのマスク着用が不要となった。今回はイスラエルにおける筆者のコロナ体験について執筆したいと思う。

### イスラエルにおけるコロナ対策

イスラエルは人口1,000万人足らず、国土も日本の四国程度の広さで、日本と比較してもかなりコンパクトな国である。その機動力を最大限に活かして、国全体が「総力戦」でコロナ対策を行ってきた。例えば、国内の多くのホテルが感染者隔離用のホテルに変えられた。

ワクチン入手方法も徹底していた。特務機関モサドが、初期の段階で世界のワクチンを掻き集めたという報道もなされた。さらに、ネタニヤフ首相はワクチン製造会社ファイザー社のユダヤ人社長と計17回の会議を行い、世界最速でワクチン供給を可能にした実績をアピールしている。そのような背景があり、2020年12月末にワクチン接種開始のアナウンスがなされて、わずか3カ月の間で人口の約6割に接種を完了させ、世界でも「コロナ対策の先進国」として知られるようになった。

### 筆者のワクチン接種体験

実は筆者も1月にワクチン接種を体験した1人だ。上記で記載した通り、ワクチン接種のためには保険に加入し、その保険会社経由で予約をする必要があったが、大学院で加入していた保険が新型コロナワクチン適用外だったため、しばらくワクチンが接種できなかった。

しかし、1月末になると筆者のような外国人や無保険の人々向けに、ワクチン接種会場が限定的に公開された。筆者はその話をイスラエル人同級生から聞き、早速接種会場に向かった。会場は筆者のような保険未加入の人々でごった返していた。係員から「システム

の都合で外国人への接種はできなくなったから帰れ」と追い返されそうになりながらも、なんとか接種所にもぐりこんだ。

受付の係員の女性に自分の名前、パスポート番号、携帯番号を伝え、アレルギー反応などの簡単な問診を受ける。係員は手元のスマホで私の情報を入力している。そうして問診が始まったかと思ったら、軍服姿の医官の方が現れ、「腕をまくれ」と言われた数秒後には接種は終わっていた。筋肉注射だから痛いという前評判があったので心配はしていたが、接種は針が入ったことにも気づかないうちに終わった。

係員から「お疲れ様。2回目の接種はちょうど3週間後に受けに来い」と言われ、その日は自宅に戻った。3週間後の2回目の接種時も、1回目と同様にパスポートを見せて、簡単な質問に答えて接種を受けた。今回も特に痛みもなく、体調不良もなかった（接種した日の夕方に強い眠気はあった）。



ワクチン接種所の様子

### 苦労した接種証明書の入手方法

2回の接種が完了すると、接種証明書とグリーンパスポートがメールで送られてくる。これを公共施設に入るときに見せると中に入れてもらえる仕組みだ。これがあれば屋内営業をしているレストランやジム、スイミングプールを利用できるようになる。さらに、いくつかの国はワクチンパスを持つ人々を隔離無しで入国を受け入れている。イスラエル生活で接種証明書は非常に重要で、これがないとコロナ禍以前の生活を送ることができない。

しかし、筆者はこの証明書の入手に大変な苦労をした。まず、接種完了後に SMS が届

く手はずになっていたが、それが一向にこない。接種センターに電話をしてみると、「来ない例はよくあるから安心してほしい」と言われてしまったので、「そんなものか」と放置していた。しかし、接種から2カ月が経過し、レストランにも入れなくなり、生活にも難儀するようになってしまった。そこで、改めて電話をしてみると「あなたが接種したデータが存在しない」と言われてしまった。

これは困ったことになったと、複数のコロナ担当課に聞いて回っていたのだが、1週間ほど経ったある日「データが出てきた」という電話がかかってきた。たけのこでもないのだから、データが出たり出てこなかったりされても困るのだが、結果的にはこれで接種証明がもらえると喜んでいて。しかし、問題はこれからだった。

そのデータと私の個人情報を照合すると、どうやら私の携帯番号が間違っているらしい。接種所の係官が番号を誤って入力して、その電話番号の修正が必要だと言われた。だからSMSが来なかったのだろう。この修正に1週間がかかった。1週間後に再度確認をすると、まだ電話番号が誤っている、という。「そんなはずはない。1週間前に修正したあれは何だったのか」と聞いてみると、どうやら受付担当が再び誤った電話番号を入力してしまい、意味のない修正の塗り重ねをしてしまったようだ。

最新テクノロジー国家を謳いワクチン先進国という肩書をもっておきながら一体このグダグダな展開は何なのだ。これでは埒があかぬと担当者からマネージャーに代わってもらい、状況を説明したところ、「解決を約束する」という一言で電話が切れた。その翌日にはパスが送られてきた。そんな簡単にパスが出るのなら、この2カ月は一体何だったのかという気持ちもあったが、ともあれ無事にパスを受け取ることができた。

## コロナ禍における海外生活の大変さ

今回コロナ禍という異常事態を海外で、しかもイスラエルで過ごしたのは、自分の人生にとっても非常に示唆深い出来事だった。色々と学びもあったし、ワクチンをいち早く接種できたのは良かったが、それ以外については当地の生活では、苦労の方が多かったと思う。

例えば、証明書1つ取得するのにさえ、上記のように、日本では簡単にできそうなことに異常な量の時間と労力をかけなければならない。また、ロックダウン中は、日本の緊急事態宣言など比にならぬ厳格な外出禁止令が敷かれた。スーパーマーケットと自宅の往復以外は不要不急の外出は一切不可。街中には警察官もパトロールをしており、職務質問もされることもある。

パレスチナ自治区ではアジア人に対する嫌がらせに何度も遭った。一番ひどい時期には、バスに乗れば示し合わせたかのように運転手も含めて皆一斉に降りてしまい、誰一人いなくなってしまう。仕方なくバスによる移動をあきらめ、徒歩で街を移動していると「コロ

ナ、コロナ」の大合唱が始まる。突然、肩をつかまれて「今すぐ自分の国へ帰れ」と迫られる。つい強い口調で言い返すと、石も3つ4つは飛んできた。家に帰って上着を脱ぐと、吐きかけられたつばの跡がいくつもあった。

通りすがりの知らない人に「コロナ」とボソッと言われたり、露骨に手で口と鼻を覆って逃げられたりするような行為は、いまだに頻繁にある。悲しいことに、エルサレム暮らす在留邦人の多くが同じような経験をしている。

## 結びにかえて

この1年間人類を苦しめ続けてきたコロナ禍。筆者が住むイスラエルではようやく終わりが見えてつつある。マスクを外して街中を歩くのも違和感がなくなってきた。同級生たちと外に遊びに行く機会も増えた。しかし、日本に住む家族や友人たちが、ゴールデンウィークは家にこもって、ワクチン接種の時期も未定で不安そうにしているのを見ると、5月晴れが美しいエルサレムの街を歩いても心は晴れないままだ。早急にコロナ禍が終結することを祈るばかりである。



マスク不要になったエルサレム市内

(写真は全て筆者撮影)